



世界をみつめて

『三国志』余滴3

明帝の煩悶

福原 啓郎

司馬仲達（司馬懿）が「燕王」公孫淵を討伐した遼東遠征からの帰途、まもなく都洛陽に到着するというとき、一大事が起こった。明帝が病魔に冒されたのである。そして、仲達のもとに長安への直行と入京という、相反する命令の詔書が時をおかずに届いた。宮中での異変を察知した仲達は単身、洛陽へ急行する。238年十二月のことである（小説の『三国志』では、翌年正月のこととなっている）。

明帝曹叡は、父の文帝曹丕の後を継ぎ、十二年半の治世の間、太極殿（大極殿のルーツ）などの造営を強行し、法令の制定、暦の改定など、内政の諸改革を精力的に実行した。吃音のせいか寡黙であったが、学問好きで記憶力も抜群、詩才もあった。情ではなく理を重んじ、評判ばかりが先行する「浮華」の連中に我慢がならず、「名声なんてものは地面に画いた餅と同じで、喰えぬわ」と吐き棄てた（『三国志』盧毓伝。なお、「餅」は「もち」ではなく、小麦粉食品であり、パンやうどんの類をさす）。清朝の雍正帝を髣髴とさせる精勤・独断ぶりは、敬慕する祖父曹操の事業を成し遂げんとする強い意志に裏打ちされていた。拙稿「三国魏の明帝 奢靡の皇帝の実像」、『古代文化』第52巻第8号、2000年所収、参照。

その明帝が十二月八日、病の床に臥した。病名はわからない。インフルエンザか。十六日目の二十四日、自身の死を覚悟した明帝は、寵愛する郭氏を皇后に立て、叔父の曹宇を大將軍に任命した。あわせて、曹宇を筆頭に夏侯獻・曹爽・曹肇・秦朗という皇族内閣の如き構成メンバーでもって次期皇帝をサポートする体制を指示した。だが、曹宇の実権掌握に危惧を懐いた中書省の二人の長官、劉放と孫資が捲き返しをはかる。曹操、文帝、明帝の三代にわたって機密に預かってきた二人の意中には実力者の仲達があった。三日後の二十七日、二人は病床の明帝に涙ながらに訴えた。藩王は輔政の任につけぬ、という文帝の詔勅を根拠に燕王であった曹宇の排斥を主張し、曹爽の大將軍任命とその曹爽と太尉の仲達二人による輔佐という代案でもって迫り、明帝も同意した。ところが、ときおり意識が混濁する明帝は、曹肇の切諫に動かされて差し戻させた。が、再度入ってきた劉放と孫資が自筆の詔書を求め、劉放がベッドに上り、明帝

の手を取って無理矢理に書かせたという。こうして決着がついた。そして、その三日後の正月一日、洛陽に到着したばかりの仲達が拜謁してまもなく、病が改まった明帝は息を引き取る。享年三十四歳。当日に皇太子に立てられたばかりの齊王の曹芳がその日のうちに即位した。拙著『西晉の武帝司馬炎』白帝社、1995年参照。

この間の明帝の心中を察するに、その無念の思はいかばかりであったろうか。国家体制の強化に邁進してきたという自負があるだけに、自身が居た皇帝の地位の脆弱さに愕然とし、自身亡き後の王朝の行く末に暗澹たる気持ちになったのではなかろうか。煩悶の中、最低限決断すべき人選が三件あった。皇太子と皇后と大將軍である。

皇太子については正月一日まで持ち越された。そもそも、明帝は男子に恵まれず、数年前から、宮中奥深く密かに二人の男子を養っていた。秦王曹詢九歳と齊王曹芳八歳である。そして、年少の曹芳を指名したのである。

それに先行して、十二月二十四日に皇后の冊立と大將軍の任命を決めた。後漢では、幼帝が即位すると、皇太后（先帝の皇后）が皇帝権を代行し、皇太后の父か兄が大將軍に就任して専権を振う、というのが通例であった。空位であった皇后に郭氏を立てたのは、明らかに皇太后に就かせるための布石である（司馬氏は郭太后の権力を最大限に利用して篡奪を実現することになる）ただし、郭太后はそもそも一族の叛乱の嫌疑に連座して宮中に奴婢として入れられており、父兄はずでにいなかった。そのため、外戚の郭氏ではなく、帝室の、しかも親族の曹宇が選ばれたのである。この人選の真の意図は、異姓の重臣である仲達の排除にあった。ところが、二十七日、帝室であるが疏族の曹爽（曹真の子）が新たに大將軍に任命され、仲達とともに輔佐する、というように覆ったのである。

幼帝を輔佐し実権を掌握する地位を帝室曹氏の身内でかためるか、あるいは、異姓の仲達を入れるか、この判断こそ明帝にとっての最大の問題があった。この問題は、突き詰めるならば、曹氏という帝室か、魏という国家か、どちらを優先すべきか、という選択肢であった。この二者択一のはざまに死の床にあった明帝の心が揺れ動き、それが皇親対中書省という権力闘争の呼び水となり、また、帰路にあった仲達への相反する詔書に反映した。そして、明帝の最終決断は、結果的には、司馬氏による王朝篡奪の道を開くが、その魏晉国家体制のもと、敵国の蜀と呉を滅ぼし、天下が統一されることになるのである。

ふくはら あきろう（教授・中国史）